







名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
----	----	----	-----	----	----	----	----	-----	----	---------	----








山樵用具

河野通明

山用具（伐採）














斧とヨキ	斧は厚みのある刃に柄をL字形に挿し込んで、立ち木を切り倒したり、丸太を割ったり削ったりする刃物の総称。俗名ヨキ。10世紀初頭の『和名類聚抄』では「斧」はオノでヨキとも記述して、どちらも古代語。民俗語ではヨキが主流で中世文書でもヨキが見えることからすれば、古代・中世ではヨキが主流だったが、近世以降、出版物が増えるにつれ漢字をもつ斧が主流になり、漢字をとまわらないヨキは俗称になった可能性がある。										
 きりよき 切よき	山の木を伐採するときに使う斧で、打撃力が刃に集中するように刃渡りは短く薄手に仕上げている。木を山側に倒すときは切りヨキで山側に断面V字形の受け口をつくり、反対側から鋸で切って倒す。古くは切りヨキだけで木を切り倒していた。	ヨキ				ヨキ	ヨキ	キリヨ ッ、カタ デ ヨ	ウヌ		
 はつりよき 削りよき	丸太の上に乗って側面を削（はつ）って角材に仕上げる斧で、効率よく削れるよう刃渡りを長くし、薄手に仕上げている。刃渡りを大きくするため蛤形だったが、軽量化して能率を上げるため首の部分を細くした改良型が現れた。	ヒロバヨキ						ハツリヨ	ウヌ		
 わりよき 割りよき	丸太を割って薪などにするときを使う斧で、刃渡りは短く断面はどなり形の手厚に作られている。刃で木口に食いつき、厚手の本体を打ち込んで楔のように押し広げて割る。薪用の柄の短いものもある。	キワリヨキ						ワイヨ	ウヌ		
 まさかり 鉞	古代・中世に武器として使われた刃広斧で、甲冑の上からの攻撃用で『太平記』には刃渡り24cmのまさかりが使われている。刃渡りが大きい広刃で側面形がハツリヨキと似ているので、ハツリヨキの別称となったと考えられる。		マサカリ			マサカリ					【大きな斧・まさかり】くぬ・はつりよき・はつり・はびろ・はんずま・さーかんゆーち 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 よきのさや 斧の鞘	斧を持ち運ぶときに危険な刃に触れないよう、また刃を保護するための刃部のカバーで、角材に刃溝を切って縄で括りつける。岐阜県高山市ではハグツ（刃者）と呼ぶ。	ヨキノサヤ	ハガラミ		ハガケ	ハガキ、ハ ガケ		サヤ	シー		
 ぞうりんがま 造林鎌	木の伐採や植林作業で木の枝を払ったり、雑木を切ったりするのに使う大型の鎌で、長い柄に厚手の刃が鈍角についている。	カリハラ イ ガマ	ナタガマ	シタカリ ガ マ	キガマ、ハ カマナ タ ガマ、オオ キガマ、シ マ、ヤブハ ガマ、ツル モカリガ マ ウリンガ マ	キガマ、ハ カマナ タ ガマ、オオ キガマ、シ マ、ヤブハ ガマ、ツル モカリガ マ ウリンガ マ		ヤボハレ ガ マ	×		【山刈りに使用する柄の長い鎌】かまえがま・なたがま 【枝を払うための鎌】なたがま・なたがんま・のぼりがま 以上、『標準語引分類方言辞典』（佐藤亮一）

木挽用具（製材）

横挽鋸と縦挽鋸	山仕事の大型の鋸は伐採用の横挽鋸と製材用の縦挽鋸に分けられる。横挽鋸は木を横に引く伐採用鋸で、刃が交互に左右に振るアサリがあるが、丸太から板を引く縦挽鋸にはアサリはない。古代・中世では鋸は大工仕事の木の葉型鋸に限られ、斧だけで樹木を伐採し、板を作るのは針葉樹を木目に沿って割っていた。中世に中国から2人引きの製材用の縦挽鋸が伝わり、近世には1人用の前挽が現れ普及した。伐採用の大型の横挽鋸の出現は、かなり後のようである。										
 やまのこ 山鋸	樹木の伐採用の大型の横挽鋸には多様な形態が見られるのでここでは「山鋸」で括った。刃は交互に左右に振るアサリをもつ。樹木の伐採には木を倒す側に斧で横V字の受け口を刻み、反対側から山鋸で挽いて木を倒す。樹の重みで鋸刃が挟まれ動かなくなるので、切り口からヤ（矢＝くさび）を打ち込んで隙間をつくって挽いた。ガンドとも呼ばれる。福島県只見では大坂の産地名でテンノウジと呼ばれていた。	ノコギリ テンノウ ジ、シン キ リノ	ノコギリ		クビツギ	ダイキリ、 メヌキ、 ノコ、 ノコ	ガンド、 オノ ノコ、 ノコ	カイリョ ウ ノコ、 ノコ			
 めぬき 目抜き	伐採用の大型の横挽鋸のうち、鋸刃4本の次にアサリのない刃がつき、次におが屑溜めの深い抉りを入れるパターンを繰り返すもの。これで鋸を引くとおが屑が効率よく掻き出され、伐採の効率が上がって普及した。改良鋸・改良刃とも呼ばれる。	テンノウ ジ、ニド ノ コ	マドノコ ノ		マドノコ、 メヌキ ノ	メヌキ ノ		カイリョ ウ ノコ、 ノコ			
 まえびき 前挽	伐採した太い材を板に挽く作業を木挽きというが、前挽は一人用の木挽鋸＝縦挽鋸で、大鋸（おが）とも呼ばれる。正確な厚さの板を引くために、鋸刃が左右にぶれないよう、鋸刃の幅を高くしてあるのが特徴である。	マエビ キ、コ ビキ ノ	タテビ キ ノ	コビキ ノ	マエビ キ ノ	オオガ、 オガ、 コビ キ、 オオ ノ	オガ、 コビ キ、 ワッ ソ コ	ダンギ ノ、 コ、 ダン キ リ、 ワッ ソ コ			
 りょうびきのこ 両挽鋸	太い丸太を胴切りにするときに使った二人挽きの鋸で、全長120cm前後。						リョウビ キ、 タテ ノ コ	リョウビ キ、 オガ ノ コ	フタイ ビ ノ コ	ヌクジ リ	
 のこざや 鋸鞘	鋸を使用しない時に刃に被せる木製の鞘で、刃に被せて紐で固定する。鋸歯を守るためと怪我をしないよう、鋸鞘におさめて持ち歩いた。	ノコギリ ノ サヤ	ノコギリ ノ サヤ					サヤ、 ハザ ヤ	ハガケ		
 くさび 楔	丸棒の一端を平たく鋭角に尖らせたもので、立木を伐採する際に切り口に打ち込んで隙間をつくって鋸を引きやすくしたり、材を倒したり割ったりするときに用いる。頭の部分に鉄環をはめて打ち込み時の割れを防いだものもある。ヤ（矢）とも呼ばれ、総鉄製のカナヤ（金矢）もある。	キヤ、 カナ ヤ	クチャ ヤ		ヤ、 カナ ヤ	ヤ、 クサ ビ、 カナ ヤ、 ク チャ	キヤ、 フク ヤ、 フク ロ ヤ、 カナ ヤ				【くさび】つめ・ヤ 以上、『標準語引分類方言辞典』（東條操編）
 かわむき 皮剥	D字形の直鋸部に刃をつけ、円弧部の中点に長い柄をつけた樹木の皮むき用の道具。樹木を伐採すると、そのまま横たえて山で枯らすと、樹皮つきだと虫がわいて木を傷めること、川流しの際に沈みやすいため、山でまずカワムキで樹皮をむいて天然乾燥させる。	カワム キ、 スギ ノ カ ワ ム キ	カワム キ		カワム キ	キノカ ワム、 カワ ム キ	カワム キ	カワム キ			

山樵

※備考欄にはあなたの地域の呼称を記入してください

名称	説明	只見	奥三面	羽村	沼津	徳山	滋賀	鹿児島	沖縄	さまざまな呼称	備考
 まわしがま 回し鎌	杉や松の樹皮は屋根葺きや壁材として貴重。この場合は決められた幅できれいに剥ぎ取ることが必要なので、マワシガマで上下2か所を横に1周して切り目を入れ、次に縦に切り目を入れ、そこに木製や鉄製の篋を押し込んで剥いだ。	カワムキツ カマ			カワムキガ マ	カワムキガ マ、カワム キ					
 かわはぎへら 皮剥篋	マワシガマで切り目を入れ杉や松の樹皮と木部の間に押し込んで起こして皮を剥ぐための篋で、木製・竹製と鉄製があった。春から夏にかけては水分を吸っているため、きれいに剥ぐことができる。	カワムキツ カマ			カワムキガ マ						
ダシ (搬出)											
 かっしゃ 滑車	伐採した材を運び出すには古くからの木馬のほか、伐採現場から集材地へワイヤーロープを張り、滑車に材を吊して下ろすこともおこなわれた。材を吊す大きなフックが特徴で、木製のほか鉄製の滑車も使われた。	カッシャ	キンシャ		セビ	カッシャ		リンジク、 カッシャ、 テッサツ	x		
 きんま 木馬	伐採した材木を山から運び出す檣で、材木を積んでかすがいとロープで固定し、細丸太を枕木のように並べた木馬道を肩繩を掛けて引き、集材場まで運ぶ。下り道では木馬が暴走しないよう材木の重みを両肩で受けて足を踏ん張って一歩一歩下り、上り坂では木馬の方を向いて一歩一歩引き上げた。	キンマ、バ チソリ、カ クソリ、ド ソリ			キンマ	キンマ	キンマ、ソ リ	キンマ	x	【山から材木を運搬する檣】きうま・きじんま・きゅーま・きんま・とびき 【木材を運搬する檣】たまびき 以上、『標準語引き方言辞典』(佐藤亮一) 【木材を運ぶぞり形の道具】きうま・きんま 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 とびくち 鳶口	トビ(鳶)のくちばしのような鉄先を長い柄の先端につけた道具で、材木の運搬の際に鉄先を打ち込んで移動させたり反転したりする。	トビ、トビ グチ、トン ビ	トンパン グチ、トン ビ		トビ	トビ、ドッ トル、トビ コソル				【鳶口】かぎざ・とびかぎ・とびのはし・どつとこ・とびんちよ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	
 かん 環	鉄の楔に鉄環をつけたもので、材木の木口に打ち込み、綱を通して引く。トチカンとも。		カン、クサ ビ		カン、ズリ カン	マンリキ、 カンブチ、 カン		カン	カン		
 かすがい 錠	鉄棒をホツキスの針状に曲げ、両端を尖らせて材木同士を固定するもの。車やぞり・木馬に積んだときに隣同士の材木に打ち込んで使う。	カスガイ	カスガイ		カスガイ	カスガイ		カスゲ			
 かくまわし	材木を動かすときに用いる鉄環つきの曲がった鉤で、環に棒を押し込んで材木を動かすが、柄が固定されたタイプもある。	ガンタ	ガンター、 カギ		カクマワシ	カクマワ シ、ガンタ		カケマンリ キ、マンリ キ			
 てこぼう 梃子棒	材木を持ち上げたり、移動したりするときに用いる2mほどの棒で、下端は材木の下に差し込みやすいよう平たく削っている。樹皮つきのものが見られるように、その場で適当な木を見つけて荒加工して使った。	ガンタ			テコ	テコ、テコ ボウ		バチ			
 やきいん 焼印	火で熱し、木に押しつけて加工者が誰かをしるす鉄製の印。材木の木口に付けて川流しの先でも持ち主の判別がつくようにしたり、桶の側材の樽丸の流通でも運搬先で加工者の判別がつくように焼印を押した。		ハン		ヤキイン	コックイ、 ヤキパン		ヤキイン			
炭焼用具											
 えぶり	炭窯から焼けた炭を掻き出し集める道具で、鉄製の長柄に掻き板をつけたもの。掻き板から柄まで総鉄製のものと、柄の末端はソケットになっていて木の柄を差し込み、長さ3mほどにして使うものがある。なお炭の掻き出しには専用の掻き出し棒を使うこともある。	カキダンボ ウ、カンダ シボウ、カ キカエンボ ウ						マエカキ			
 すみふるい 炭篩	割竹を粗めに編んで通にした片口箕で、炭俵に詰め残した炭を振るって粉炭を選別するもの。金網製もある。	スンプルイ						スンプイ			
 すみだわら 炭俵	炭を運送するための俵で、茅で編んだ藁を縦に合わせて本体とし、棧俵には柴を曲げて蓋とした。円筒形のほか、四角いタイプもあり、長さ52cm、33cm角ぐらいで重さは15kg。	スミスゴ、 スミダワラ			スミダワラ	スミゴモ	スミダワラ	ダツ		【炭俵】かやず・こも・ざつ・すご・すみすご・すみだつ・だつ 以上、『標準語引分類方言辞典』(東條操編)	